



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「怠惰な理性」と「転倒した理性」：『証明根拠』と『純粹理性批判』におけるカントの自然神学批判
Author(s)	増山, 浩人
Citation	哲学, 53, 7-25
Issue Date	2019-01-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75501
Type	departmental bulletin paper
File Information	53_t2.pdf



「怠惰な理性」と「転倒した理性」

―『証明根拠』と『純粹理性批判』におけるカントの自然神学批判―

増山 浩人

はじめに

本稿の目的は、一七六三年に出版された『神の現存の論証のための唯一可能な証明根拠』（以下、『証明根拠』）の自然神学批判と『純粹理性批判』（以下、『批判』）の自然神学批判の間にある連続性と断絶を明らかにすることである。『批判』「超越論的弁証論のための付録」（以下、「付録」）には、「怠惰な理性（die faule Vernunft）」と「転倒した理性（die verkehrte Vernunft）」という二つの誤った理性使用のあり方を論じた箇所（B717-721）がある。この箇所では、カントは、当時の自然神学がこの二つの誤りに基づいていることを指摘している。したがって、この箇所の議論から、カントが当時の自然神学に対してどのような問題点を見出していたかを明らかにできるはずである。

とはいえ、この箇所の議論の背景を理解するためには、『証明根拠』に着目することが不可欠である。確かに、同書の目的は、物の可能性から神の現存を証明する「可能性に基づく証明」が最も有力な神の存在証明であることを明らかにすることである。しかし、同書の第二部において、カントは包括的な自然神学批判を展開している。結論を先取りすれば、同書の自然神学批判は、『批判』の議論と共通の問題意識の下に行われている。したがって、同書の自然神学批判は、当時の自然神学に対するカントの態度の変遷をたどりつつ、『批判』の議論の独自性を明らかにする

ための手がかりになるはずである。

にもかかわらず、『証明根拠』の自然神学批判に関する代表的な先行研究は、同書とその他の前批判期著作のみを主な考察対象としている。¹⁾もちろん、この事実はこれらの研究そのものの価値を揺るがすものではない。しかしそのために、批判期のカントが『証明根拠』の自然神学批判をどのような形で発展させたのか、ということが十分に明らかにされていないのも確かである。これに対し、本稿では、両著作を比較検討することによって、『批判』の自然神学批判がいかなる紆余曲折を経て形成されたかを示したい。

議論は以下の順序で進められる。まず、一では、『批判』『付録』における「怠惰な理性」と「転倒した理性」に関する議論を概観する。二では、この議論と『証明根拠』の自然神学批判との間に強い連続性があることを示す。三では、『証明根拠』において、カントが、「可能性に基づく証明」を用いてどのように自然神学の問題点を改善しているのかを示す。最後に四では、『批判』において、「可能性に基づく証明」が放棄されてもなお、『証明根拠』の自然神学の改善案が形を変えて保持されていることを明らかにする。

一 『批判』『付録』における自然神学批判 ― 「怠惰な理性」と「転倒した理性」の誤り ―

本節では、「怠惰な理性」と「転倒した理性」に関する議論がどのような自然神学批判であるかを明らかにする。その前に、本稿における自然神学という用語の意味を確認しておこう。カントがここで念頭に置いている自然神学は、いわゆるPhysikotheologieである。Physikotheologieとは、自然の合目的性からその原因としての神の現存と諸属性を認識する科学経験論的な自然神学のことである。このタイプの自然神学は主に一七―一八世紀のイギリスで支持されていた。実際、ロバート・ボイル、ジョン・レイ、ウィリアム・デラムら当時のイギリスの哲学者・神学者は、

Physico-Theology」という用語を上記の意味で使用している。⁽²⁾ カントは、こうした英国系の経験論的な自然神学とドイツ講壇哲学者による形而上学の一部門としての自然神学を明確に区別していた。⁽³⁾ そして、『批判』『付録』での自然神学批判は、主に前者のタイプの自然神学に向けられているのである。そこで本稿では、自然神学という用語を原則的にPhysikotheologieの意味で使用する。

では、「怠惰な理性」から見ていこう。この箇所では、「我々の自然探求を、それがどのようなものであれ、端的に完結したものとみなされるようにし、したがって理性を、あたかも自らの業務が全て終わってしまったかのように、休息状態にしてしまう全ての原則」(B717f)と定義している。その上で彼は、当時の合理的心理学における魂の不死の証明と自然神学の双方が、「怠惰な理性」に基づいていると説明している。本稿の主題である自然神学における「怠惰な理性」について、カントは以下のように述べている。

「というのも、自然神学においては、自然において示されるあらゆる目的、むしろしばしば単に我々自身によってそのように考えられたあらゆる目的は、諸原因の探求において我々をきわめて安易にさせることに役立つ。その結果として、我々は、これらの諸原因を物質の機構の普遍的諸法則において探求する代わりに、直接最高の知恵の探求不可能な思召しを引き合いに出し、理性使用が放棄された場合には、理性の労苦を完結したものとしか考へるようになってしまふのである」(B719)。

この文章では、合目的性を持つ事物の原因の探求方法に関する自然神学者とカントの立場の違いが明示されている。例えば、カントは、当初は液状だった地球が回転運動を繰り返すことによって現在の形になったと主張している(B715 Anm.)。後で詳しく説明するが、この主張の背景には前批判期以来の彼の物質観と宇宙生成論がある。それは、

物質に内在する力と自然法則によって、自然が現にある形で生じたという機械論的自然観である。ここでの「物質の機構の普遍的諸法則」に依拠した諸原因の探求とは、この自然観に依拠した自然探求のことを指している。これに対し、自然神学者は、地球が楕円形であることが地軸が傾くのを防止するために有用であることを着目する。その上で、彼らは、この目的を実現するために、神が地球をそのような形に作り上げた」と主張するのである。しかし、彼らの方法は、事物の原因を神の介入に帰することによって、一つの事物の原因を扱うミクロレベルの自然探求を中断させてしまうことになる。この点を批判したのが「怠惰な理性」の誤りである。

次に「転倒した理性」に関して。この誤りは、世界全体の合目的性、神意にかなった全体としての自然の原因の説明様式にかかわる。カントによれば、自然は物質の力と自然法則によって生じた一つの全体である。確かに、カントは、この全体を目的論的全体としても考察できることを否定していない。それどころか、彼は、諸物の目的連関の考察を通して自然の目的論的統一を探求することを、理性の統制的原理に数え入れてさえいる。この点は、「体系的統一（非目的論的統一）の理念は、統制的原理として、この統一を普遍的な自然諸法則にしたがった物の結合において探求するためにのみ、そして、この統一のいくらかが経験的探求によって見いだされうる限りにおいて、それだけ一層理性使用の無欠性へ、もちろんそれに到達はできないにしても、近づいたと信じるためにのみ役立つべきであろう」（B720）と説明からも裏付けられる。それでも、彼は、機械論的自然観を支持し、目的論的統一が作用因に基づく自然統一に先行することはないと主張している。

にもかかわらず、「転倒した理性」においては、「その代わりに、事柄がひっくり返されて、合目的統一の原理の現実性が実体的原因として根底に置かれ、そのような最高の叡智の概念が、それ自体で全く探求不可能であるがゆえに、擬人神観的に規定され、その上で自然に諸目的が暴力的かつ専制的に押し付けられる、というところから話が始まってしまふ」（Ebd.）。つまり、「転倒した理性」は、目的論的統一を自然統一に先行させてしまうのである。この

立場を、カントは「しかし私が最初に秩序を与える最高存在者を根底に置くならば、自然統一は実際には廃棄される」(B721)と批判している。それは、「転倒した理性」が、神の介入を強調しすぎるあまり、機械論的自然観を支持することを妨げるからである。したがって、「転倒した理性」の誤りとは、世界全体の合目的性の原因を扱うマクロレベルの自然探求における不当な神の介入を批判したものだと言える。

このように、カントがこの二つの誤りを導入したのは、自然神学がミクロレベルとマクロレベルの自然探求の双方を妨げることを指摘するためだと考えられる。つまり、「怠惰な理性」の誤りはミクロレベルの自然探求に関する誤りを、「転倒した理性」の誤りはマクロレベルの自然探求に関する誤りを扱っているのである。双方の誤りは、「自然の合目的性は神の後付けの介入なしには発生しえない」という共通のテーゼ(以下、「介入テーゼ」)から発生する。これに対し、カントは、機械論的自然観を支持し、「自然の合目的性は神の後付けの介入がなくとも発生しうる」というテーゼ(以下、「不介入テーゼ」)を対置する。以上がカントの自然神学批判の基本方針である。『批判』『付録』は、こうした基本方針をきわめてコンパクトに提示したテキストだと言えるだろう。

二 『批判』と『証明根拠』の自然神学批判における連続性

次に、『批判』の自然神学批判と『証明根拠』の自然神学批判との間の連続性を明らかにしよう。『証明根拠』第二部第五考察において、カントは当時の自然神学には三つの問題点があったと指摘している。それらの問題点とは、①有機体と無機物の扱い方を混同していること、②自然探求を阻害すること、③無からの創造を説明できないこと、という三点である(Vgl. II 118-123)。その中でも、『批判』『付録』の議論に強く関連しているのは、②である。

②を論じる際に、カントは、自然神学の方法を「自然設備が有用であるやいなや、総じて、この設備は、直接的に

神的意志の意図に基づいてか、あるいはやはり特別に技術によつて仕組まれた自然の秩序を通して説明される」(II 119)と特徴づけている。例えば、自然神学者によれば、川は、人間が飲み水や農業用水を確保できるように、神によつて配備されたものとされる。つまり、川の直接の原因が善意を持つ神に帰せられることになる。しかし、この見解を取れば、川の原因を世界内部に探究する必要がなくなってしまう。その結果、地中に溜まった地下水が地上にあふれ出ることで川が生じたという自然科学の知見が見逃されることになるのである。この点について、カントは「物理的根拠が必然的でより普遍的な諸法則との結合によつて帰結を規定することがなおも想定されうる場合に、精神的根拠、つまり目的に基づく説明を頼みにすることは、哲学的洞察の拡張を妨げる」(II 122)と述べている。このように、『証明根拠』においても、カントは、自然神学者の「介入テーゼ」が自然探求を妨げていることを問題視していたのである。

確かに、『証明根拠』において、「怠惰な理性」と「転倒した理性」という用語は使われていない。しかし、同書で、カントは、有用な形状を持つ諸物が生じた原因を直ちに神の意志に帰する自然神学が、「品位を落とされた理性」(die erniedrigte Vernunft)に基づいていると指摘している。その上で、彼は以下のように述べている。「品位を落とされた理性は好んでさらなる探求(「自然における諸原因の探求」)を放棄するが、それは、この理性がそのような探求を出過ぎたものだと考えるからである。そして、この偏見が一層危険なのは、それが、敬虔と偉大なる創造者への正当な帰依という口実の下に、倦むことのない研究者よりも怠け者を優先させるからである」(II 119)。この文章では、自然神学者に帰せられている「品位を落とされた理性」が「怠け者」と重ね合わせられている。したがって、ザラの指摘するように、『証明根拠』の自然神学批判は、『批判』における「怠惰な理性」に対する批判の先駆形態であると言える⁴。さらに、『証明根拠』でも、カントは、可能な限り機械論的自然観に依拠した自然の合目的性の説明を試みている。したがって、同書においても、カントは、「転倒した理性」の誤りやその解決策としての「不介入テーゼ」

を支持していたと考えられる。

とはいえ、カントはどのように「不介入テーゼ」を正当化したのだろうか。つまり、機械論的自然観に依拠して、自然の合目的性の可能性を説明することはいかにして可能だったのだろうか。この問いに回答を与えるのが、『証明根拠』の自然神学の改善案である。次節では、その概要を見ていこう。

三 『証明根拠』における「可能性に基づく証明」による自然神学の改善案

『批判』とは異なり、『証明根拠』はあくまでも自然神学を擁護するための書である。したがって、その議論も、理論的な意味での自然神学の不可能性を示すのではなく、あくまでも新たな形での理論的な自然神学の方法を模索するという形をとることになる。その鍵となるのが、同書第一部で提示される「可能性に基づく証明」である。そこでまず、この証明の特色を明らかにしよう。

この証明の前提として、カントは、可能性概念の論理的条件と質料的条件を区別している（Vgl. II 77f.）。例えば、「四角い三角形」という概念は内的に不可能である。「四角い」と「三角形」という概念は、互いに自己矛盾しているからである。この自己矛盾を含まないということが可能性の論理的条件である。これに対し、「四角い」と「三角形」という概念、つまり「可能性の質料」が与えられているということが、可能性の質料的条件である。「四角い」と「三角形」という概念が我々に与えられていなければ、そもそもこの二つの概念を比較し、自己矛盾を含んでいるか否かを判定することは不可能だからである。

この区別に依拠して、カントはおよそ以下のような証明を行っている。「可能性の質料」は我々に与えられていないわけではない。そうでなければ、いかなる可能なものも成り立たないことになるが、それは明らかに事実と反する

からである。それゆえ、「可能性の質料」の根拠となる存在者が現存しなくてはならない。しかるに、「その廃棄ないし否定があらゆる可能性（『可能性の質料』を根絶するものは、端的に必然的である）（II 83）。したがって、「可能性の質料」がなければならぬ以上、必然的存在者、つまり神が現存しなくてはならない。この証明は、批判期のカントが多用了「不可欠性論証」の一種であると言うことができる。

さて、この証明は、『証明根拠』の自然神学の改善案においてきわめて重要な役割を果たしている。それは、カントがこの証明を用いて自然神学者の理論的前提を覆っているからである。では、カントは、自然神学者の議論がどのような前提に基づいていると考えていたのだろうか。この点について、彼は同書第二部第五考察で以下のように述べている。

「自然設備が有用であるやいなや、総じて、この設備は、直接的に神的意志の意図に基づいてか、あるいはやはり特別に技術によって仕組まれた自然の秩序を通して説明される。それは、その最も普遍的な諸法則に適合した自然の諸帰結がそのような調和へとは帰着しえない、という考えに固執しているからか、あるいは仮にもこれらの普遍的諸法則がそのような調和という帰結を持つと認めてしまうならば、これは世界の完全性を盲目的偶然性に帰することになるが、このことは神的創造者をきわめて誤解させるであろうからか（119）のいずれかである」（II 119）。

まず、自然神学者とカント双方の議論の前提を確認しておこう。その前提とは、「世界において合目的性がない」という選択肢が排除されていることである。それは経験的事実に反するからであろう。したがって、両者の目的は、現に成り立っている自然の合目的性がいかにして可能であるかを説明することにある。

さて、このテキストから、自然神学者が「介入テーゼ」を支持せざるをえなかった理由を以下のように説明できる。彼らが避けようとしたのは、「自然の合目的性は、物質の力と自然法則だけから、それ以外に何の理由も根拠もなくとも、成り立つ」という「盲目的偶然性テーゼ」である。このテーゼに依拠した場合、自然の合目的性が成り立つために、神が全く関与していないことになる。しかし、自然において、神が全く関与していない部分があるとすれば、それは神の全知全能という性格に反することになってしまう。そして、この不合理な帰結を避けるために、彼らには「介入テーゼ」しか残っていなかったのである。要するに、自然神学者は「盲目的偶然性テーゼ」と「介入テーゼ」の二者択一に陥っていたというのがカントの評価である。

だが、カントによれば、この二者択一の原因は、自然神学者が「物の内的可能性が神から独立している」という前提を支持していた点にあるという。この点は、「仮に私が自然の事物について、普通そう考えられているように、その内的可能性がそれ自身独立的で、いかなる外的根拠も持たないと考えるならば、いくらかの完全性を伴った世界が、多くの超自然的な作用なしには不可能であると言ったとしても、予想外だとは全く思わないだろう」(III 112)という記述からも裏付けられる。したがって、「物の内的可能性が神に依存している」という自然神学者とは異なる前提に立てば、「盲目的偶然性テーゼ」とも「介入テーゼ」とも異なる第三の道、つまり「不介入テーゼ」による自然の合目的性の説明が可能になる。この第三の道を樹立することこそが、カントの戦略なのである。

とはいえ、「可能性に基づく証明」はどのようにして「不介入テーゼ」を基礎づけるのだろうか。この点を知るためには、一七五五年に書かれた『一般自然史と天界の理論』(以下、『一般自然史』)の議論に着目する必要がある。同書で、カントは、物質にはニュートンの引力と斥力が本質的に内在している、という立場を取る。そして、この二つの力に基づいて、合目的性を備えた宇宙の生成過程が説明されるのである。この点について、カントは「世界を最も単純な混沌へと移し替えた後に、私は引力と斥力以外のいかなる力も自然の偉大なる秩序を展開させるためには

用いなかった。この二つの力は双方とも等しく確実で、等しく単純でありながら、等しく根源的で普遍的である。この二つの力はニュートン哲学から借用されている」(I 234)と述べている。さて、『証明根拠』第二部第七考察「宇宙生成論」で、カントは、『一般自然史』の宇宙生成論の梗概を自らの自然神学の改善案の実践事例として提示している。したがって、『証明根拠』の物質観は、基本的に『一般自然史』のものを継承していると考えられる。

以上の点を踏まえた場合、「可能性に基づく証明」は、物質の力と自然法則に基づく自然の進行そのものの可能性が神に依存していることを担保していることになる。『一般自然史』で示されたように、引力と斥力は物質の本質である。しかるに、本質とは、ある物が可能であるために不可欠な規定である以上、物質の本質も、物質の「可能性の質料」の一部をなす。したがって、引力と斥力も、物質の「可能性の質料」に属することになり、神に依存していることになる。それゆえ、引力と斥力の帰結である自然の進行の可能性も、神に依存していることになるのである。

とはいえ、引力と斥力に基づく自然の進行が、神意にかなっているとどうして言えるのだろうか。その鍵となるのが、神の本質と意志が調和しているというテーゼ（以下、「調和テーゼ」）である。この点については、『証明根拠』第一部の結論部に以下のような説明がある。

「意志は常に事象そのものの内的可能性を前提するのだから、可能性の根拠、つまり神の本質は、神の意志と最大の調和のうちにあるだろう。両者は、神が自らの意志によって内的可能性の根拠であるかのように調和しているのではない。むしろ、両者が調和しているのは、あらゆる物の本質との間に根拠という関係を持つまに同一の無限の創造主が、同時に最高の欲求がそれによって実現される最大の帰結に対する関係を持つからであり、後者の関係は前者の関係を前提にした場合にのみ実りあるものになりうるからである。したがって、神的自然によって与えられている諸物そのものの可能性は、神の偉大なる欲求と調和するであろう」(II 91)。

カントはこの箇所でおよそ以下のような議論を行っている。神の本質は、他のあらゆる可能性を根拠づけるという性格に他ならない。『証明根拠』第二部第八考察で、カントは、この性格を神の「完全充足性 (Allgenugsamkeit)」（II 151）と定式化している。さて、神の本質は神の意志と調和している。したがって、神の本質に根拠づけられた他のあらゆる可能性からは、神の意に反した帰結は生じえないことになる。この「調和テーゼ」に基づく議論によって、カントは、神自身から発現した「延長している」、「引力と斥力を持つ」といった物質の本質から、神の意志に反することが帰結しえないことを示しているのである。⁽⁵⁾この点は、カントが、「可能性に基づく証明」が有効であれば、「自然が必然的諸法則にしたがって働くところでは、直接の神の修正が介入する必要はないだろう。諸帰結が自然の秩序にしたがって必然的である限りで、最も普遍的な諸法則にしたがってさえも、神の意に反することは決して起こりえないからである」（II 110）と主張していることから裏付けられる。

さらに、カントは、以上の議論そのものを新たな自然神学的証明として位置付けている。この点は、『証明根拠』第二部第五考察において、従来の自然神学的証明に加え、「自然において知覚される必然的統一」（II 116）に依拠した自然神学的証明が可能であることを指摘していることから裏付けられる。ここでの「必然的統一」とは、物質に内在する引力と斥力という唯一の原因が、合目的性を備えた無数の事物を生み出す事態を指している。⁽⁶⁾したがって、カントの自然神学的証明は、以下のように再構成することができる。a. 合目的性を備えた事物が現に存在する、b. この事物は、物質に備わっている引力と斥力から帰結する、c. しかるに、「調和テーゼ」に基づき、物質の力だけから合目的性が成り立つのは、物質の力の可能性が神に根拠づけられている場合に限られる、d. したがって、合目的性を備えた事物が存在する以上、神は現存しなくてはならない。このように、カントの自然神学的証明は、「可能性に基づく証明」なしには成り立たないのである。⁽⁷⁾

以上のことから、『証明根拠』における自然神学批判の改善案の特色を以下のように整理できるだろう。カントは、

「盲目的偶然性テーゼ」に基づく徹底的な機械論的自然観の問題点を自覚していた。この点に限れば、カントと自然神学者は軌を一にしている。とはいえ、彼は「介入テーゼ」を支持するわけにもいかなかった。そこで、カントが目指したのは、機械論的自然観を可能にする道具立て、つまり、物質と自然法則そのものの可能性を神に依存させることだったのである。この神の自然に対する根源的関与によって成り立つ機械論的自然観の可能性を示すことが、カントの自然神学者に対する応答である。

とはいえ、『批判』においても、カントはこの改善案を保持しているだろうか。『証明根拠』とは異なり、『批判』では、理論的な神の存在証明は全面的に否定される。となると、『証明根拠』の改善案は、『批判』では維持されえないように見える。新たな自然神学的証明とその理論的支えである「可能性に基づく証明」もまた、理論的な神の存在証明に他ならないからである。そこで次節では、『批判』において、カントが『証明根拠』の議論をどのように発展させていったのかを示そう。

四 神の理論的な存在証明から理念の統制的使用へ — 『批判』における自然神学批判の位置づけ —

前節で見たように、『証明根拠』の自然神学の改善案の核心は、「可能性に基づく証明」と「調和テーゼ」によって、「不介入テーゼ」の可能性を根拠づけた点にある。結論から言えば、この改善案の大枠は『批判』でも維持されている。しかし、理論的な神の存在証明を許容しない『批判』において、この改善案はどのような変容をこうむらなくてはならなかったのだろうか。本節では、この点を明らかにしたい。

まず重要なのは、『批判』において、カントが「物の可能性は神に根拠づけられている」というテーゼ（以下、「可能性テーゼ」）を完全には放棄していないということである。この点は、「純粹理性の理想」第二章「超越論的理想

(超越論的原型)について」(B599-611、以下「理想章」)において、カントがこのテーゼを集中的に論じていることから裏付けられる。とりわけ以下の箇所は、『批判』における「可能性テーゼ」の位置づけを知るためにはきわめて重要である。

「理性が、この自らの意図、つまり、単に諸物の必然的な汎通的規定を表象するという意図のために前提するのは、理想にかなったそのような存在者の現存ではなく、そのような存在者の理念だけだということ、そして、それは汎通的規定の無条件的全体性から条件づけられた全体性、つまり制限された事物の全体性を導出するためであることは、おのずから明らかである。したがって、理想は、理性にとつてあらゆる諸物の原像(原型)であつて、欠如のある模写(模倣)としてのあらゆる諸物は、自らの可能性のための質料をこの原型から取ってくる。

諸物は、理想に多かれ少なかれ近づいていくが、それでも理想に達するということは決してないのである」(B605f)。

この引用文では、「可能性テーゼ」が以下のような形で提示されている。有限な思惟対象は、否定的な規定Ⅱ否定性と肯定的な規定Ⅱ実在性を含む全体である。さて、あらゆる否定性は実在性に依存している。それに加え、有限な思惟対象に含まれる実在性も、神に含まれるより高い度合いの実在性に由来する。したがって、有限な思惟対象に含まれる否定性と実在性の双方は、全ての実在性を最も高い度合いで保持している神に由来しなくてはならない。

確かに、このような形の「可能性テーゼ」は、『証明根拠』のものとは異なる。『証明根拠』においては、原則的に思惟対象に含まれる個別の「可能性の質料」と神との間の制約―被制約関係が問題となっていたのに対し、この引用文では、汎通的に規定された思考対象そのものと神との間の制約―被制約関係が問題となっているからである。この

点は、この引用文で、有限な思维対象が「制限された事物の全体性」、神が「汎通的规定の無条件的全体性」と特徴づけられていることから裏付けられる。したがって、『証明根拠』における「可能性テーゼ」とこの引用文での「可能性テーゼ」は区別されなくてはならない⁽⁸⁾。しかし、どちらの「可能性テーゼ」も物の「可能性の質料」とその可能性の条件としての神を結びつける点では共通している。したがって、「物の可能性の質料が神に依存している」という考えそのものは、『批判』においても依然として残っていると言える。

では、『証明根拠』と『批判』との間の最も重要な相違点はどこにあるのか。それは、「可能性テーゼ」を神の存在証明から理念の統制的使用にかかわる主張に変換した点にある。この引用文の前半部からわかるように、『批判』における「可能性テーゼ」は神の現存を必要とするものではない。この点は、後続する議論において、カントが、「こうした全てのこと（＝神が有限な事物の根源であること）は、ある現実的な対象の他の諸物に対する客観的関係を意味するのではなく、理念の諸概念に対する関係を意味するのである。そして、このことは、かくも際立った利点を持つ存在者（＝神）の現存に関して我々を全面的に未知のままにするのである」（B607）と述べているからも裏付けられる。それでも、思维対象における「可能性の質料」が条件づけられたものである以上、その可能性の条件である神を想定し、探求することは、理性の必然的な要求となるのである。このように、「可能性テーゼ」を神の存在証明から切り離れた点に、『証明根拠』と『批判』との間の相違を見て取ることができる。この点はウッドやスタングによっても指摘されてきた⁽⁹⁾。

さて、こうした「可能性テーゼ」の位置づけの変化に着目することは、『批判』『付録』の自然神学批判の特色を理解するために不可欠である。このことは、「付録」の以下の記述からも裏付けられる。

「理性概念にのみ基づいているこの最高の形式的統一は、諸物の目的論的統一であり、理性の思弁的関心は、世

界におけるあらゆる設備を、あたかもそれが最高の理性の意図から生じたかのように考察することを必然的にする。というのも、そのような原理は、経験の領野に適用された我々の理性に対して、世界の諸物を目的論的諸法則にしたがって連結し、このことによって諸物の最高の体系的統一に到達する、という全く新たな展望を与えるからである」(B714f.)。

この箇所では、自然神学者と同様、カントが事物の合目的性を神の意志の直接の産物とみなす「介入テーゼ」を支持しているように見えるかもしれない。しかし、この箇所に続く約十ページでカントが「介入テーゼ」を徹底的に批判している以上、この箇所はそうのように読まれるべきではない。むしろ、この箇所で、カントは、「不介入テーゼ」を支持し、物質に内在する力と自然法則によって生じた事物の性状が、合目的性を持ち、神の意志に調和しているかのようになさなくてはならない、と主張しているのである。したがって、『批判』において、「不介入テーゼ」は理念の統制的使用に関する主張となっていると言える。

このことから、『批判』『付録』においても、カントは、『証明根拠』とはほぼ同じ戦略で自然神学を批判していることがわかる。確かに、『批判』『付録』では、「可能性テーゼ」に関する直接の言及はない。しかし、前節で見たように、「可能性テーゼ」は、「不介入テーゼ」を展開するための必然的条件であった。それゆえ、統制的原理としての「不介入テーゼ」は、少なくとも統制的原理としての「可能性テーゼ」を前提しなくては成り立たないのである。したがって、『可能性テーゼ』に基づいて「不介入テーゼ」を基礎づけている点に、両著作の共通点が認められる。

もちろん、両著作の自然神学批判の間には大きな相違点もある。前節で見たように、『証明根拠』において、「不介入テーゼ」を根拠づけるのは、「可能性に基づく証明」という不動の前提であった。このことによって、自然探求を始める前に、「不介入テーゼ」の妥当性も確定されてしまっている。それゆえ、『証明根拠』の枠組みでは、自然探求

は、「不介入テーゼ」を経験レベルから再検証する営みにすぎないことになってしまふ。これに対し、『批判』において、「不介入テーゼ」は、自然探求に動機と方向づけを与えながらも、その真偽に関しては永久に決定されえない、という性格を持つことになる。このように、「不介入テーゼ」を理念の統制的使用に関するテーゼとして仕立て直した点こそが、『批判』の自然神学批判の独自性をなしているのである。

おわりに

本稿では、『批判』の自然神学批判と『証明根拠』の自然神学批判との間にどのような連続性と断絶があるかを明らかにした。『証明根拠』から一貫して、カントは、自然神学者の「介入テーゼ」に自らの「不介入テーゼ」を対置することによって、自然神学者を批判していた。しかし、『証明根拠』において理論的現実性を持っていた「不介入テーゼ」は、『批判』においては理念の統制的使用に関する主張となる。この変化の背景には、『証明根拠』において最も確実とされていた「可能性に基づく証明」からの離反が、より一般的には言えば、神を哲学の始点とみなす当時の形而上学からの離反がある。以上のことから、『批判』における自然神学批判、とりわけ「怠惰な理性」と「転倒した理性」をめぐる箇所は、『証明根拠』の自然神学批判を批判哲学の見地から展開しなおしたものであると言える。

※カントの著作からの引用はアカデミー版カント全集から行う。その際、アカデミー版カント全集の巻数をローマ数字で、頁数を算用数字で示す。ただし、『純粹理性批判』からの引用は、第二版をBとし、頁数を算用数字で示す。なお、原文のゲシュェルトは傍点で示した。また、「」は筆者による補足である。

- (1) その例としては、Schmucker, J., *Die Ontotheologie des vorkritischen Kant*, De Gruyter, 1980 の 107-135 頁と Theis, R., *Gott: Untersuchung zur Entwicklung des theologischen Diskurses in Kants Schriften zur theoretischen Philosophie bis hin zum Erscheinen der Kritik der reinen Vernunft*, Frommann-Holzboog, 1994 の 11-143 頁が挙げられる。これらの研究は、『証明根拠』に関する古典的かつ重要な研究ではあるが、『批判』の議論に関する分析はほばない。
- (2) 例えば、デラムの主著『自然神学、すなわち創造の御業に基づく神の現存と属性の論証』(*Physico-Theology, Or A Demonstration of the Being and Attributes of God, from His Works of Creation*) (二七-三三) は、Physico-Theology の実例としてきわめて重要である。なお、同書の内容を知るためには、以下の論文が有益である。門井昭夫、「ウィリアム・デラムの『自然神学』」、『健康科学大学紀要』、六号、健康科学大学、二〇一〇年、四三-五四頁。
- (3) 例えば、バウムガルテンは、自然神学を存在論、世界論、心理学とともに、形而上学に数え入れている。その内実は、先行する三つの部門で得られた概念を材料にして、数学的方法に即して、神の現存と属性を明らかにするアプリオリな自然神学である。
- (4) Vgl. Sala, G. B., *Kant und die Frage nach Gott: Gottesbeweise und Gottesbeweiskritik in den Schriften Kants*, De Gruyter, 1990, S. 154f.
- (5) テイスは、この議論をヴォルフの物体論と自然神学との対決であるとみなしている。彼によれば、カントとは異なり、ヴォルフは、物体に内在する現実的な力は、物体の本質ではなく様態でしかないと主張している、という。この点を論拠にして、ヴォルフは、自然の合目的性が偶然的であり、神の介入なしには帰結しないと主張しているというのである。Vgl. Theis, R., *Kants frühe Theologie und ihre Beziehungen zur Wolffschen Philosophie*, Fischer, N. und Forscher, M. (Hrsg.), *Die Gottesfrage in der Philosophie Immanuel Kants*, Herder, 2010, S. 33f. このように、カントの自然神学批判とヴォルフ哲学との関係を論じることは重要な課題である。ただ本稿では、この課題にはこれ以上立ち入らない。
- (6) 『証明根拠』で、カントは、多くの事象が一つの根拠に基づいている場合、これらの事象間には必然的統一があると主張している (Vgl. II 106f.)。その例として、彼は、地球が球形であること、地球が遠心力に対抗して物体を押し戻すこと、月が回転することといった多くの事象が、重力という一つの根拠に基づいていることを挙げている。

(7) とはいえ、『証明根拠』において、カントは、旧来の自然神学的証明を不可能だとみなしたわけではない。この点は、『証明根拠』第三部第四節において、彼が「可能性に基づく証明」を「存在論的証明」、自然神学的証明を「宇宙論的証明」と名付けた上で、「論理的な正確さと完璧さが重要である場合、存在論的証明（＝「可能性に基づく証明」）に優位を認めるべきだが、健全な一般常識にとつてのわかりやすさ、印象の鮮明さ、美しさと人間本性の道德的動機へ訴えかける力が要求される場合、宇宙論的証明（＝「自然神学的証明」）に優位が認められるべきである」（II 161）と述べていることから裏づけられる。確かに、この引用文で、カントが旧来の自然神学的証明と自らの自然神学的証明のどちらを念頭に置いているかは、特定しが見えように見える。しかし、別の箇所、カントは、旧来の自然神学的証明の正しさを確信するためには、「悟性の通常概念で十分である」（II 116）のに対し、自らの自然神学的証明には、「哲学」（Ebd.）しかも「哲学の中でも高次のもの」（Ebd.）が要求されると主張している。この点を理由に、ザラは、この引用文が旧来の自然神学的証明のみを念頭に置いて書かれていると主張している。Vgl. Sala, a. a. O., S. 191f. 筆者もザラの主張を支持し、この引用文でカントが旧来の自然神学的証明のメリットを述べていると解釈した。

(8) 久保は、カントが一七七〇年頃には『証明根拠』タイプの「可能性テーゼ」を放棄し、『批判』タイプの「可能性テーゼ」つまり、「汎通的規定に基づく証明」に移行していたとの見解を提出している。この点については、久保元彦「現存在の根拠の問題と総合判断」、日本哲学会（編）、『哲学』、一九九〇年、法政大学出版局、一九六九年、二六三—二七六頁、とりわけ二七〇—二七二頁を参照のこと。この久保の見解については議論の余地があるが、本稿ではこれ以上立ち入らない。なお、久保は、「汎通的規定に基づく証明」が神の存在証明の批判のために果たしている役割について、久保元彦「神の現存在の存在論的証明に対するカントの批判について」、『カント研究』、創文社、一九八七年、三五—四二〇頁でより詳しく論じている。

(9) Wood, A. W., *Kant's Rational Theology*, Cornell University Press, 1978, pp. 71-79. ウッドは、批判期のカントにおける「可能性に基づく証明」の位置づけについて詳しく論じている。また、スタングは、超越論的理想に関する議論を『証明根拠』に端を発する議論をカントが批判哲学の用語で再構成したもの」と位置付けている。Stang, N. F., *Kant's Modal Metaphysics*, Oxford University Press, 2016, p. 290.

（謝辞と付記）

平成一八年度から平成二六年度までのほぼ九年間、若干の空白期間を除き、筆者は新田孝彦先生の『純粹理性批判』演習に参加し続けてきた。ドイツ語テキストを現行の英訳や邦訳、文法書を参照しながらゆっくり読み進める標準的な訳読演習であったが、テキストの内容に関しても自由闊達に議論が交わされた。この演習は、筆者にとっては研究のための基礎体力を鍛える場であるのと同時に、新たな論文のテーマを発見するための場でもあった。本稿の構想も、「純粹理性の理想」を扱った平成二六年度の演習での議論を通じて得られたものである。新田先生にはこれまで様々な場面でお世話になり続けてきたが、この場では、とりわけ演習の場で受けた学恩に関して、改めてお礼申し上げたい。

また、筆者は、平成二七年度から日本学術振興会特別研究員PDとして上智大学の大橋容一郎先生の下で研究する機会に恵まれた。先生とは、平成二七年度前期の『形而上学講義』演習や先生の研究室でカント哲学の様々なテーマについて議論することができた。先生との議論も本稿を執筆するための大きな手がかりになっている。またその他の場面でも、大橋先生は筆者の研究活動をサポートし続けてくださった。この場を借りて大橋先生にも改めてお礼申し上げたい。

なお、本稿は平成二七年度～二九年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費 課題番号15J05615）による研究成果の一部である。